

閑聖漫錄

13
3053

閑聖漫錄



口 13
3053
口 15
3053
卷

正志會澤先生著

閑聖漫錄

江戸書肆 青藜閣

水戸書肆 東壁樓 發

先君武公嘗曰儒者不好武古今皆然儒而好武如會澤恒藏豈易得哉蓋此時先生少壯尤好武事云今先生論著行於天下天下服其學識而至其生平

閑聖漫錄 序

好武則未必知也頃書賈
刻閑聖漫錄請余題言余
乃錄前言以授之令讀者
知先生有文有武論著決
非空言矣元治甲子春日

青山延光撰

閑聖漫錄目錄

父子血脉

陰陽五行

高山氣冷

榴荷社

長崎謝方神社

功烈神祀

天益人生者必滅相友

性善

天命



交舞得諫

孔子弟子

思不出位

聖賢勢實行

孔子討陳恒

周易象象不可執一端

君子淑女

王孫夷

神聖同歸



父子血脉

會澤安述

天祖天不在一々 皇孫子天位之讓又結もんかそそ
 之神也を授け發新此降をまよむす本天地と窮も家
 の故一とあそひひよふし天位の分はて今もあ
 ると 皇統歴たるも人乃知る所も法も
 鏡を指たりて吾見是を視んと吾を視るの如く
 ると 父子の親情を今も
 映し 天祖の遺體
 天祖の統中不在ひたれ今日親志く 天祖と

一 陰より異なり、凡そ是に依りて、父子の親懐き、子も萬世も
 於一日の如し、凡人の父祖と子孫とは同體一氣なりて子
 る世とつても、血脉傳承して、絶るることなく、其理と論せん
 不ち先天地と物の本と言へ、夫は天地乾坤より陰
 陽の二氣あり、天は陽ふきて形なり、地は陰たれ、形は
 とも天氣を受て、凝結せられ、地の形となり、あり、ついで
 毛管中運行し、活物たる故、生氣充滿して、萬物と散
 生し、萬物皆天地の生る所なれ、二氣より、二氣と具へ
 生る氣と、金と土、形も形なり、人の四肢五官、地氣と受て、形
 となり、二氣と呼吸して、四肢五官、充滿し、二氣相合ふ

時、二氣を得て、四肢温ふして、生れ、呼吸盡て、天氣推
 於、時、死く、冷たう、魂氣散して、天に帰る、形、魂、地
 魂、聖とある、又、二氣、平、今、二氣、の、動、極、の、物、も、二、氣、と、合
 て、生、せ、一、物、た、れ、二、物、の、合、む、和、氣、陽、氣、二、氣、中、の、氣、血
 を、ま、い、り、回、轉、乃、温、ゆ、二、氣、血、流、行、は、る、力、と、い、て、肢、肉、乃
 全、物、は、消、化、し、一、物、の、形、を、全、く、形、と、成、せ、る、原、因、と
 以、て、筋、骨、肌、肉、筋、骨、を、全、物、は、氣、道、と、ま、い、り、二、氣、と、
 二、氣、の、動、功、小、非、る、に、た、り、一、地、の、二、氣、の、動、物、は、生、活、は、る、
 一、二、氣、の、動、功、小、非、る、に、た、り、各、く、厚、薄、な、れ、とも、大、率、人、は、
 一、二、氣、の、動、功、小、非、る、に、た、り、受、て、生、活、は、る、一、是、も、異

たるふたふた水と土の融法たるを以て陰中
 故陽たつて地中は流石もたつて土の血脈引下
 四肢の運行はゆる如く天候地中に入りぬを感
 志く草木を滋生し根抵より枝葉を連ねる水と土
 即ち地中のぬき法外なるたつぬき流通はる
 血脈のぬきたれは陰陽合く生活し水と土は陰
 陽融とく枯槁たる物死活皆は道徳たつて
 物皆一死一活ありても其生るは万物の始りたる
 志く後來迄永くあることなり植物も一旦生る
 て枯るは死とす枝葉は結ひたる實は地中に入り又

再ひ生の新樹樹る形状は各々別たつては地中
 入りぬき実の樹る枝葉を以て根抵のぬき法
 せしたれは旧樹より新樹と傳承して葉葉枯と
 ともくもつて永く連綿はるる子孫は先祖の
 遺徳を以て承るは是れ同一の代樹を以て葉
 ともく血脈連綿して一貫流通なること先祖と
 子孫は異なりは先祖と承るは子孫は後を以て天
 竺西洋などの偏宋は國はかくの如く先祖と已て子
 孫と眼前の二世あること知らしめて一後
 況を設て人々世に外は過去未來の別世果ありて現

在^{ザイ}と合せて之をわつと誰も入^イ人もなくやういふ
 たく^クや中の梅岡^{ロウカク}乃やく^ナ及申ふ^シを説く^{セツ}のやく^{ヤク}矣
 形^{カク}実^{ジツ}十^{ジウ}事^シの誘^{ユウ}授^{ジュ}も^モた^タは^ハし^シて^テ成^{セイ}意^イ想^{ソウ}を^ヲ以^リて^テ梅^{バイ}一^{イツ}本^{ポン}以^リ督^{トク}
 者^{シヤ}の目^{モク}睫^{セツ}の物^{モノ}も^モ見^ミ及^ジ固^コ中^{チュウ}と^ト撰^{セン}索^{ソク}は^ハさ^サる^ルぬ^ク心^{シン}風^{フウ}と
 病^{ビョウ}む^ムその^ノ已^イの^ノ心^{シン}と^トも^モあ^アる^ルの^ノ物^{モノ}と^トも^モあ^アる^ルて^テ忍^{ニン}怖^フは^ハる^ルの
 や^ヤう^ウい^イふ^フは^ハ解^ゲか^カれ^レ生^{セイ}老^{ロウ}病^{ビョウ}死^シと^ト患^{ウヰ}ふ^フは^ハ切^キ切^キなる^ルゆ^ユに^ニ
 然^{ニキ}る^ルふ^フ苦^ク思^シて^テ絶^{ゼツ}て^テ是^シと^ト解^ゲ脱^{ダツ}せん^ンと^ト成^{セイ}求^スむ^ムを^ヲ後^ゴ
 小^コハ^ハし^シま^マる^ルの^ノ苦^クと^ト毎^{バイ}死^シ志^シて^テお^オよ^ヨ後^ゴを^ヲさ^サる^ルふ^フと^トあ^アる^ル一^{イツ}と
 考^{コウ}へ^ヘ出^デて^テ及^ジ世^セに^ニ入^イる^ル一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 此^{ココ}説^{セツ}と^ト梅^{バイ}一^{イツ}本^{ポン}疾^{シツ}の^ノも^モ如^ニく^ク忍^{ニン}怖^フは^ハる^ルと^ト盡^{ジン}く^クて^テ矣

形^{カク}も^モ幾^ケ物^{モノ}と^ト目^メふ^フる^ルよ^ヨ矣^イと^トい^イふ^フは^ハ一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 の^ノ時^{トキ}は^ハ化^カら^ラぬ^ルや^ヤき^キ敷^キの^ノよ^ヨふ^フ解^ゲ脱^{ダツ}せん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 子^コ卵^{ラン}八^{ハチ}本^{ポン}の^ノ蚕^{サン}も^モよ^ヨし^シる^ルは^ハ一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 永^{エイ}世^セまで^デ他^タ物^{モノ}も^モ変^{ヘン}せ^セぬ^ルは^ハ一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 る^ルふ^フ異^イた^タる^ルは^ハ一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 吾^ゴ世^セの^ノ前^{ゼン}と^トも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 よ^ヨ矣^イと^トい^イふ^フは^ハ一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 乙^ニ祖^ソの^ノ神^{カミ}と^ト伝^{デン}き^キ給^キひ^ヒ流^{リウ}中^{チュウ}の^ノ内^{ナイ}教^{キョウ}ハ
 一^{イツ}て^テ即^{キツ}ち^チ 天^{テン}祖^ソの^ノ神^{カミ}も^モ一^{イツ}の^ノ苦^クも^モあ^アら^ラん^ンと^トも^モ思^シふ^フと^ト世
 乙^ニ祖^ソの^ノ遺^イ教^{キョウ}と^ト思^シふ^フと^ト世
 乙^ニ祖^ソの^ノ遺^イ教^{キョウ}と^ト思^シふ^フと^ト世

天来と受つて始とせし又地を以て得て漸くして
 形とありて人等の民用に切られぬと徳括して之を
 一と云ふ物皆を地乃ち土と云ふと同様の物と受取
 果して流動の八卦と坎と水は坤地の中より一
 陽と陰とを同様に申す活動の象あるは地中
 の充滿するは人の體の中は血あるの如し陰の漸く中
 小天来の陽は活きありて流動志と下下しては月ハ
 陰よりして水の結ありて陰ハ柔と合むるの如し陰の中ハ
 合ふは陽を以て日と受て光を生ず濫ハ鋼の如銀
 と陰よりして何れも陰の漸くするものたるは是と以て自然

と合むる時ハ感して之を生じ火ハ陽の漸くして炎始りて
 状とせし八卦ハ乾の乾陽の中より陰ありて陰意地
 系ハ漸くして土と成りて地ハ充滿する陽象有る
 此物ハ漸くして炎と成りて火也陰陽合するは陽
 系ハ漸くして炎と成りて火也陽象有るは陽
 精ハ漸くして土と成りて地也陰陽合するは陽
 陰象有るは陽象と成りて火也陰陽合するは陽
 此物ハ漸くして土と成りて地也陰陽合するは陽
 乃ち此物と以て之を以て引く時ハ感して火を生じ本ハ
 此物ハ漸くして土と成りて地也陰陽合するは陽

を施して法ハ気と交乾ハ大始と智坤ハ物と化来ハ天
 地の初極の物一ツツ乾の始々坤の来々はあり
 ふかた一初極の中ふかたは生とるもの植物も
 洪範
 ふかた本と区約の二がて本と穀を本と属と
 してその
 性として去愛稼穡の二の穀ハ人命と
 其の
 の功用乃第一かれは他の草木と異なり
 稼穡のみ専ら
 云ふ属としてそと人乃稼穡とるもの
 外は穀とるもの
 外は穀とるもの
 われは穀とるもの
 の用ハ穀とせしめるもの
 土の
 土の

まともな田種をいへるもの
 るもの
 ちんは五材として
 する初なるもの
 く民用をたせしもの
 るもの
 を受けるもの
 物や物とて
 知ること
 寸と稱して天地の道と成来して地の宜と成補
 成来して

子ものまれば五行をまきまきしる物としてその徳物
 として種々の事あり依て人の作用をまきまきし
 五十年八政守極之徳水の九疇を他用と人九疇のあ
 るる即ち水火土の性質ある同一系物
 は皆偏系たる如く下と上とせし炎と土と
 浮下せし人の徳物をゆるめ、その用をまきまきし古
 より天地の如く天地よりある一身終るまでありて
 乃るまきまきし四枝と及を運用す如く火の浮下炎
 としるは月の視耳の徳にありまきまきし一箇れ用を
 ち他とまきまきしありまきまきし四枝

五及を運用し人を天地の如くまきまきしる物として
 乃る小天地よりして天地の大人身より形物を令りて
 形の氣を呼吸し其の物を運りて日用しる地人合
 るる相離るる一として陰陽の用ありまきまきし物
 ち一日月星辰の天の形あり山嶽河海の地の形あり陰
 陽天地の性質ありて其性質あり大易に於て
 陰陽の性質を以て然るる西洋の垂文の窮理の精
 密なるは誇りしは天地の形状を論して其地より
 性ありて其性質あり陰陽の理を闡く天地の法物
 たるは其性質あり天地を以て一と見れば同じく死物と

何^レ^カもふて地の^レを^レほ^レる^レも^レんや孔子天道を^レ言^レひ
給^レふとつ今^レ極^レく^レや^レも^レ成^レは^レひ^レの^レ言^レひ^レ後^レ
き^レも^レあ^レる^レも^レ後^レ人^レも^レ地^レを^レ為^レの^レ遠^レ野^レ人^レ深^レ意^レ
意^レを^レ悟^レら^レし^レる^レ言^レひ^レの^レ遠^レ野^レ人^レ深^レ意^レ
管^レ見^レを^レ述^レぶ^レや^レ

高山寒冷

高山^レ地^レを^レ耕^レして^レ大^レ陽^レに^レ近^レけ^レば^レ寒^レ熱^レは^レ可^レふ
却^レて^レ冷^レか^レる^レ本^レ居^レの^レ末^レ流^レを^レ以^レて^レ陰^レ陽^レの^レ理^レを^レ以^レて^レ
又^レ陰^レ陽^レを^レ知^レる^レ言^レひ^レや^レ地^レを^レ耕^レして^レ大^レ陽^レの^レ光^レを^レ受^レ
る^レ言^レひ^レを^レ會^レじ^レぬ^レ言^レひ^レを^レ生^レか^レる^レ言^レひ^レを^レ中^レに^レ以^レて^レ

て^レ地^レを^レ耕^レして^レ如^レ温^レ熱^レせ^レし^レ言^レひ^レを^レ金^レ石^レを^レ夏^レ日^レに^レ思^レふ^レ
時^レハ^レ熱^レく^レ熱^レひ^レ養^レけ^レる^レ言^レひ^レを^レ金^レ石^レを^レ耕^レして^レあ^レと^レ恐^レる^レ言^レひ^レ
熱^レく^レ熱^レく^レの^レ如^レく^レ地^レを^レ耕^レして^レ時^レハ^レ漸^レ結^レして^レ陽^レを^レ會^レ
物^レと^レあ^レる^レ言^レひ^レを^レ中^レに^レ以^レて^レ熱^レく^レ熱^レく^レの^レ如^レく^レ地^レを^レ耕^レして^レ時^レハ^レ漸^レ結^レして^レ陽^レを^レ會^レ
知^レら^レし^レて^レ陰^レ陽^レを^レ耕^レして^レ夏^レ日^レに^レ思^レふ^レ
如^レく^レ地^レを^レ耕^レして^レ如^レ温^レ熱^レせ^レし^レ言^レひ^レを^レ金^レ石^レを^レ夏^レ日^レに^レ思^レふ^レ

稻荷社

小林文康曰山城國紀伊郡稻荷神社あり世の俗に社稱
を^レ神^レの^レ名^レと^レ思^レひ^レ誤^レす^レ又^レ稻^レを^レ神^レと^レ思^レひ^レま^レす^レ言^レひ^レ
又^レの^レ中^レに^レ稻^レを^レ神^レと^レ思^レひ^レま^レす^レ言^レひ^レを^レ中^レに^レ以^レて^レ
稻^レ荷^レ神^レと^レ思^レひ^レま^レす^レ言^レひ^レを^レ中^レに^レ以^レて^レ

蒲生又義も山城國の松原山に松多きれに世伝松を編
舟の神鹿^{ツシ}セー^{ツシ}たふといつて世に松原社に松の松むら
多きとも松の好て人の業に業する^{ツシ}獣むれ人の松原
を松と思へ松も又とて業に業し^{ツシ}己の松むれ^{ツシ}わたり
あり人より松をかきせらる^{ツシ}て和の^{ツシ}まじりき^{ツシ}成也

長崎諏方神社

長崎志元龜天正法南雲國より渡り^{ツシ}和宗大^{ツシ}成^{ツシ}志成
怒^{ツシ}之長崎神社不^{ツシ}破^{ツシ}破^{ツシ}却^{ツシ}或^{ツシ}は^{ツシ}掃^{ツシ}拂^{ツシ}神道大^{ツシ}表^{ツシ}たる^{ツシ}時^{ツシ}肥
前佐賀小使^{ツシ}たる^{ツシ}仲^{ツシ}治^{ツシ}志^{ツシ}青^{ツシ}木^{ツシ}成^{ツシ}り^{ツシ}金^{ツシ}寺^{ツシ}院^{ツシ}賢^{ツシ}清^{ツシ}日^{ツシ}
と神國たると家去崎より^{ツシ}和^{ツシ}成^{ツシ}と^{ツシ}退^{ツシ}治^{ツシ}神道^{ツシ}を^{ツシ}

興せむ^{ツシ}憤^{ツシ}激^{ツシ}以^{ツシ}家^{ツシ}族^{ツシ}勿^{ツシ}友^{ツシ}松^{ツシ}押^{ツシ}け^{ツシ}せ^{ツシ}八^{ツシ}賢^{ツシ}法^{ツシ}日^{ツシ}神^{ツシ}國^{ツシ}の^{ツシ}成^{ツシ}と
志^{ツシ}く^{ツシ}神^{ツシ}忠^{ツシ}國^{ツシ}忠^{ツシ}を^{ツシ}遂^{ツシ}ん^{ツシ}事^{ツシ}八^{ツシ}何^{ツシ}の^{ツシ}難^{ツシ}き^{ツシ}る^{ツシ}の^{ツシ}あ^{ツシ}らん^{ツシ}と^{ツシ}元^{ツシ}和
九年去崎より^{ツシ}中^{ツシ}下^{ツシ}なる^{ツシ}小^{ツシ}名^{ツシ}使^{ツシ}も^{ツシ}れ^{ツシ}た^{ツシ}り^{ツシ}西^{ツシ}山^{ツシ}村^{ツシ}に^{ツシ}山^{ツシ}田^{ツシ}孫^{ツシ}左
傳^{ツシ}又^{ツシ}神^{ツシ}道^{ツシ}志^{ツシ}あり^{ツシ}たる^{ツシ}の^{ツシ}あ^{ツシ}り^{ツシ}と^{ツシ}なり^{ツシ}て^{ツシ}あ^{ツシ}り^{ツシ}て^{ツシ}神^{ツシ}を
孫^{ツシ}與^{ツシ}の名^{ツシ}を^{ツシ}説^{ツシ}し^{ツシ}孫^{ツシ}と^{ツシ}衆^{ツシ}の^{ツシ}共^{ツシ}に^{ツシ}志^{ツシ}い^{ツシ}同^{ツシ}志^{ツシ}の^{ツシ}宗^{ツシ}巴^{ツシ}森^{ツシ}城^{ツシ}寺
を^{ツシ}招^{ツシ}て^{ツシ}候^{ツシ}論^{ツシ}古^{ツシ}書^{ツシ}の^{ツシ}傳^{ツシ}字^{ツシ}を^{ツシ}語^{ツシ}曰^{ツシ}去^{ツシ}崎^{ツシ}法^{ツシ}寺^{ツシ}御^{ツシ}方^{ツシ}大^{ツシ}御^{ツシ}神^{ツシ}
社^{ツシ}又^{ツシ}信^{ツシ}吉^{ツシ}社^{ツシ}森^{ツシ}崎^{ツシ}大^{ツシ}指^{ツシ}現^{ツシ}天^{ツシ}正^{ツシ}交^{ツシ}縁^{ツシ}以^{ツシ}切^{ツシ}支^{ツシ}丹^{ツシ}と^{ツシ}傳^{ツシ}交^{ツシ}せ^{ツシ}る^{ツシ}に
乃^{ツシ}つ^{ツシ}山^{ツシ}田^{ツシ}孫^{ツシ}く^{ツシ}山^{ツシ}田^{ツシ}社^{ツシ}大^{ツシ}御^{ツシ}神^{ツシ}八^{ツシ}薩^{ツシ}あ^{ツシ}り^{ツシ}の^{ツシ}勅^{ツシ}傳^{ツシ}也^{ツシ}和^{ツシ}成^{ツシ}先^{ツシ}惡^{ツシ}の
初^{ツシ}大^{ツシ}酒^{ツシ}の^{ツシ}地^{ツシ}白^{ツシ}衣^{ツシ}の^{ツシ}元^{ツシ}の^{ツシ}現^{ツシ}一^{ツシ}信^{ツシ}と^{ツシ}惡^{ツシ}挑^{ツシ}の^{ツシ}字^{ツシ}と^{ツシ}國^{ツシ}神^{ツシ}乃^{ツシ}
を^{ツシ}い^{ツシ}て^{ツシ}と^{ツシ}知^{ツシ}り^{ツシ}神^{ツシ}社^{ツシ}を^{ツシ}毀^{ツシ}ち^{ツシ}楳^{ツシ}以^{ツシ}故^{ツシ}斬^{ツシ}く^{ツシ}薩^{ツシ}あ^{ツシ}り^{ツシ}ゆ^{ツシ}と

欲以と見今大浦の地ふある所方社に四徳あり又後野
 母浦モウラに元出流の産あり流る一歳便船と云ふ人そ一息と
 一客をあらん云賢法ありて哉一前代に神の末孫九郎
 左衛門を大村より移りて島相縁一吉田殿に於寛永元年奉
 引長谷川指六の訴吉田殿を誅状を以て致申申出され
 江戸に渡進あり聖なる法代吉末次第下知ありく西山
 の内此地を寄附せられ之社同殿小勧修に十一年より神
 原氏神尾氏ある所中へ福中へ市中に改宗すれども其時多
 かりし改宗はるをさうざいし 悉く焼殺一市中に他國の高
 人ふと招き来て多額の神徳を崇めお礼を修せりむ

一と詔され人たふ思惟一命を賜けられ毛以於キコ
 の御念やう倫ふ道に帰徳一神よりお祭の時に人
 皆く徳を考へ一その守にた多る於祈ふる事誠方た神
 乃奉礼始と神輿御旅タビ 渡津トキヨ 所中順高をら西へ供
 の踊と勤め神樂カクラ 湯ユ 立流瀧馬タテヤマ の神牛の儀式を神
 調て信人令く神徳と為敬する事とたれり慶安三年と
 乃社地小掃いと古話志和歌壇浦通は大同
 を祀りたれり民の神と為敬するは古来の風俗たれり
 古話の如く物やを信するは海邊地と云り神と敬する
 時に民の悦ばるるはかくの如く我ら久しく佛子改伏一夫

半地獄の尻氏セシシは漆塗シシしたる如く流る氏を迷ミヨはる
 彼ホの寺ホはる如く天中地獄の尻を以て佛説と擲チし已に如
 説シも引介シし六祖宗の如き如き其シ子シ守シ夷シといひ其
 を改シるの如き宗シの改シめと務シをせしめし祖宗乃半シ
 見遠ケン藏佛エンシキといひ説シひて一塗シものを拍コウ泥テイせしれし神
 社シと敬シ 儒術シを崇シめ又是を以て如きを擲チし即ち
 去シ時シ 諏方社の如き一瑞シと見つる 又神道方古川シあり
 述シむ所押シとの屋敷シは蘇地ありて神名義法を好むもの大
 乞シを許シはと之學シ士林氏シの如きも素宗シに世シく儒礼シを用シの
 佛説シと擲チし及國シにも會津シまで神道を用シの如シ 其シ云々

儒法を用シの如き又佛前シ及シは足利アシカ學シ授シ伊シ禮シ小松丹波シ乞
 心シも儒礼シを以シてと云シ神を敬シし儒と信シするもの如き
 小松シはるが如き也 祖宗シ此法シは活用シありしかくの如シ
 今長崎シの下本シを抄録シヨウして人情シの向シし所シとんシふ是シを
 了シ既シは某寺シの檀越シと説シしたるふ又素神シ乃シ氏子シと説シ
 せし如きはあらと其の説シを以て明シくして且儒礼シの制シも立
 ちし如きはるが如き固シく拒シ絶シの意シありて廢シる

地獄神祖

古大御尊シの神畫シと祀典シ小列シし中シも天児テン屋命ヤ河原ヘ車クルマ
 宮シの法社シありたり命シはた和身ワ市シ弘安コウ房フウ國クニ小シの社シあり

ことども早賦のち悟るにありは論せし名賢の初字も大徳冠
 ハ多武時^{タクハシ}の成ありやく楠氏に内は新田氏に跡は
 兼地氏に記後源唯成は伊勢常陸に祀りて休の名賢におの
 國に小祀たりしよこの心を興起するの一體なる一
 天を人せむ無賦相反

神あり古より我と天を人と稱し天をふて生む必滅と云
 ぞねるは是る地其自然なる終也東方は陽をの成
 初よりやく生ずあり和樂一して勇^{ユウ}格^{キョク}あり西方は陰を
 の凝^{カヤ}結^{ケツ}とる如ありはる陰を重て人情風俗冷寒
 能^ニ沈^シ著^セはるやく活意なく深^シ刻^{コク}して陰^{イン}陽^{ヨウ}ちうなりそ

道とゆるはるは東方は天地の生物ととなりて生民の倫理と
 功あり西方は群滅をとりて死後の禍福と説く東西
 の陰陽^{カクメイ}の自然なりて出^デ入^ニの^ノお^ハ反^ハは^ルなり
 天地の初^{イサ} 伊^イ 契^サ 母^サ 陰^ミ 神^{コト} ありて日^ヒ 小^コ 人^ニ 以^テ 教^ム
 とありて 伊^イ 契^サ 母^サ 陽^{ヨウ} 神^{コト} ありて日^ヒ 小^コ 人^ニ 以^テ 教^ム
 を生^ハ じ^ル 一^ト の^ノ 一^ト なる^カ 如^ク 日^ノ 小^ニ 人^ニ 以^テ 教^ム あり
 ありとも生るに死るは多く人民あるは死るは地のもな
 じは生をて生るを称して又空^{ソウ}なるは死るは終なり
 人も會^カ 然^ル 生^ル ものら必^ズ 死^ス 生^ル 本^ニ 又^シ 然^ル 故^ニ 佛^ハ 生^ル 必^ズ
 滅^ス 死^シ 生^ル 業^ヲ 枯^ル 生^ル 中^ニ 生^ル 業^ヲ 舍^テ 以^テ 深^ク 刻^ク 事^ヲ

苦の安楽杯と稱し一くちとて樂と云ふて是を
 厭ふむ人の子も苦と云ふれども其に苦と云ふを樂の多きと
 知し父母の子を愛し育し子孫に傳へて徳下の教を承
 け居あつて之氏を喜ひ是と治め冠札を止め争訟と
 種も患害を免れめ夫婦あまて男女室は居り祀
 先の後と進き父母小事へ子孫と書し兄弟あまて同
 く父母の徳下は喜言せしれ死喪急難はたふお謀り朋
 友あまて志と仰りて相成る是皆人世の樂也又人の
 の終りも嬰孩よりて月ふ去り一箇日強く知識日
 に昇け學ひ習ふて一日も熱く冠婚とて仕官化業

凡人もよつきて勸学はあれども多る歎ふは其をいふ人
 ちとて衣服住居の量と飲食意財あつて欲と終り衆人の
 中よハ笑苦艱難もいれども多る人を通親とて其康寧
 事事なるハ多く終る憂戚は沈むおハ憂戚あるハ日
 物も憂戚のともふれあつて以て起きて其の光沢休き合時
 ふハ父母妻子とて飯と食ひ一か又ハ他人の更りもむ
 けし後法とて一敗れ破産も寒暑も堪へ雨雪と
 けし身も應じたる産業と云ふところ十日と通親すれハ
 平和なりてその中に刑罰艱苦の時も多し小人ハ戚と
 してたふ憂る所も多し其の時も憂戚あつてかくたふことし

去矣の級也あつ月八日の光を更へ光を生ひ白の光に
ちりの光ゆてあま光あふらう後書ら書ふ能て一
日の中小包ま家朝日の夜に朝日にうく電二百たれを
目と教へく書と教へひ初極の物配 杖へもさせの終
めして又死られは生来を子へ傳へせらるの介は死道といふ
あふらうく後理かす一人は遠を去り一人は少死道と
えうま及まひ故小孔子も未知也其知死とのもて人道
しせんと知るまをのとなつはや未と説くは態度もあつ
ふやうらゆて又事かなく人倫は善あ一人を教へ
あうとれつても事教ふるもあく人倫のあうやうも親

切よとく片時も絶さずいふこと地獄に落ちる人のやうに
世よとんよはゆる人の道を知ひさと樂うて善人あふは
恨ひ 伊弉諾の神徳と仰さうは世を厭い憂戚愁
苦はゆるやめはまはゆるをいへてめしたく
まへくをく流る人たや

性善

性善の性善を先と論じると詳なれば後人の論と
ははたのめたうされども良人の中よはせはたう
あれは性善と物て性善又善悪混はる地極の定況あ
然とも性善なる善悪子も始るふあはき舞の時より又曲

人と通観して人の性念欲乃性異なるを以て性一
 宰て是を善とす一善を善の善の善を善とす一善自ら
 消人の心を宰て樂て善とす一善自ら消也性善の流
 ちて下の同じ心と大觀せし人ふ就く細流一善を
 抑く一善を善とす一善の人の善とす一善を善と
 一善と為さく一善を善と消ゆるを先一人を
 束縛く一強て縛採ゆる一逆ちり易の泰否二卦を子
 を大く一善と小く大觀せし人ふ大如細流ゆる小也性
 善の流ハ天子の君たり性善の流ハ人の人なり一善の
 流はては善とす一善とす一善たるは性善の流ハ天子古の

之論と云へ

天命

を世新きの流と如むものあつてはぬふと論一
 一善と執一國と奪一人の流と云ふ一湯武と指
 てるよや古の人君のて下と有つて一命を命とす
 と流る善の流の時より一帝載るも天一人を成
 亮天地とも云く一善位ハ自己一人の位非す天帝も代てそ
 事業と成むるも職なりハ良らもよ命せらけり也
 一善の善徳なり一善を善と討ゆると天命天討と云ふ
 一善の善徳なり一善を善と討ゆると湯武の殺伐と云ふ

冥途カシ世人ニヤウおち泥ニにシ入ルてシ又シ信ニ託スしてシ道ノの福
善ニ福ヲ法ニてシ就シてシ善人もシ福ヲ獲ルてシ悪人もシ福ヲ得ルるノの
多クとシ物ヲ以テ友ト言フ教訓の徳命ヲ救フの類とシ引テ論スるノの事
是ハ心ヲ知ルまシてシ地ノ大キをシ知ルるノ也ト天ヲ至ルてシ大キをシ下
はシるノ度ニ至ルるノ事物正シみシ諸般の事業ヲ行フるノ事業
よク割リつめたらぬニてシ小シ整トなるノ事業得ルるノ事業
高トして小シなるノ事業の情也ト云フ鳥獸もシ及テ其ノ心ヲ知ルるノ事業
網ヲ獲ル臨ニ井ニ投ルるノ事業もシ亦シ斧ヲ行フ水ヲ取ルるノ事業もシ亦シ
不存高ト一ガ人ノの事不存もシかくノやク有キの物命ヲ
とシらルるノ事業有ルるノ事業あるノ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ

天ノ至ルたらぬノ事業とシ覆テ言フるノ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
小シ窺ルるノ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
不存高ト一ガ人ノの事不存もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
一人ノ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
思フ時ヲ失フ風雷水旱の災あらむノ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
世ヲ以テ友ト言フ教訓の徳命ヲ救フの類とシ引テ論スるノの事
つれたらぬノ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
おもいふ事業もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ
もシ亦シかくノやク有キの物命ヲ

流しとるに河をさよりの毒不毒あふやく天ふいせも
 粒としてつるかしてむらとらるる人の天ふ福徳
 あるしそよ同くの子よ自ら備るる人の去程紀曆
 黒哲強弱勇怯知愚才藝の巧拙状貌の美醜が各々分
 備りて多寡人とつふ差あり接へたる根ふあつむちり面
 くの毒ふ毒も皆々その天命あれは天子は天命を知り
 て是よあし自と行て命と後つのも也然る流俗流俗の
 徒何の事なく長史少と終るのやくあ意は貴論と出
 一人をくして天命と終るも少人僥倖の心と興出は人
 情世道小害あふるもあつて聖人の天命とそよは政

ちあし益あり等ふて下と流るもの天ふ代て天師とあること
 して職するは天命はる而と思ひく事と敬慎して種忽
 あせ及競業とて天より命せらるる職業を専ら度せ
 てしんも成思ふ見天命を畏て人るとはる也一書を流る
 もの天事禍福なまて分あること知く命ふあ 世あるま
 して感したるは是天命と知くても動さし君子流俗のあ
 也聖賢の天命をさふ流俗流俗の政教は益ある流俗の偏見は
 ちとくに異見をせしなるれとてするふれ一の益あふ
 多くれ害あるものいふは是の相反はるや

素心禅讓

思不出其位とあるは至當なりし人々悟り易き新られ
 ち論辨を不待して明かりしこと其位といふは六
 之より已の位を辨へて其の多し位に云人其の如く士
 農工商の四なりし中農工商は庶人なればと号して
 人ふ治らざるものなりと事又道を学ばざるもの治さる
 士は君を佐けんと号して人と治るものあり世俗は士は
 治らざる穢よりいひて政の得失を思念するは穢と通
 ることありて其の氏よりあるはの祿を更て人々を治れ
 たりと号して人と治るるを知らざるは穢なり世俗は
 治らざる故あるものこと此穢と通るものなりと事

きいふを將順一其意を匡救するは道也政事の道を
 知らざれば其意も知らざりて將順匡救するはあり
 一介の武士なりとも治能く一瞬たり人と変るふことあり可
 名得失を見ざるは指衡なり時其善政を流るればあれ
 ども是も惑ひなりと附和して其政の妨とあり人と相
 親する人々疎きをよかりて少人の勢を助長するは是
 ならず不忠なり也れとも政能とむるは是もよく不忠は臨ふ
 ことありて其の治人の道を心得ざるはと得ざるは曲禮
 あり地度大惑而不治是亦さく恥也と云ふは地治るは
 忍た支の恥なりと云ふ論なりとも其の祿と食とをわたり

國の恥を以て其身を優游して居る、空氣の如きものにして
その恥を以て居る也然に天下の政治の得失を知るは、
の位に當りたる者なりは、その學ぶものも、その論
語中の熟讀を始として、弟子に政を講ぶるは、めと政治
乃、同考を載たる者甚多し是を以て見る時は、其の學
ぶもの己の位の庸人と異なるるを悟るべし

聖賢勅實行

聖賢の空論と好むる一て、空論と貴ぶる人の志業も、
位に當りたる者なりは、孔子の時に周道衰たるとして
も、文武の道ある地は、
て人あり孔子の聖と

魯公と依りて周の法を修りて周室と夾輔し、
子成徳達材のあふりて多きは、
て、何國や、れ、周道再興して、
月と為るの志と、
是を以て志を得、
るふ及、
城の、
を、
游弱、
再興、

之文行よりて空論のありきるなり唐の時佛法行れ人
 の或迷し今ハ韓退之出て其人道のありきるなりと論
 一 佛骨を宮中ふりおとすと傳め且其人を人よりけり
 唐よせん云ふことよふ下漸感てその多きて遂
 子探滅と云ふは得られし後世具眼乃人と興起せし
 るハ其功なり云々の宗の代ハ祖朱以下の法儒力を
 盡して佛を排撃しは其探滅し得しこと人ハ世道
 害ありとて論てを見て人心を驚費せしことおのり
 其空論のありきりて文行なり 神ありて然澤
 此の法其本は言あるを論相せし世に惑と解り

として其後の害後世に多くなく切迫也佛の言ハ揚墨
 深く近せよとて洋教の言ハ佛と同日の論ハあり佛の
 意ハ其法と弘く衆人を披流しむるをわき洋教ハ人ハ
 傾て其國を奪んとし初め西事に入り程なく畿内を法
 國も行きしと豊后大宰其地を奪りて海外に逐逐し
 東の宮殿禁を設て誅戮し終ひ 大敵をよみて其穢
 滅せし是は佛と天下の民國家の嚴禁よりて極て邪
 悪なること成知るべきものなりされども授慈の戒夷攻
 る請われ流術と設て陰謀と煽誘せん禍を包蔵
 して肺肝と見らるや 然るも近來洋学せしは

人て地人の道も信く安ふは夷の窮理とて天地と死物と
 たる僻説と工藝の巧なると醫術杯の病源と論せし
 況ふ速劫とふし極のつやも眩惑とて人倫も礼義も不
 脱夷と指す者人よも信せざるやと云ひや一人として
 小洋夷と尚慕はるるをせしむるは日洋夷とて地の出来
 たる小島して洋夷の後被掃とら誘ふあふいはんと
 思ふものや袂と引くふ相率て夷小島に下りて是を
 民と驅て外虜の掌握に歸せしむるは兵書をも人をも
 敵の美と況のむむと勿れと云ふる即ち是も法法の
 僧格林心上書して邪説の害と論して曰く欲各省傳

教夫天主教絶滅倫理廢弃綱常愚者即以耶穌之邪説
 蠱惑其心智者即以取中國之金銀要法其心不數年間
 邪德之邪說流行孔孟之正道不作正氣必不成世界矣
 且洋素則愚者蠱惑已甚智者要信已深中國人民反
 為賊風非藉寇兵而何其害何窮と云殿北瀟と云ふ事云
 て各省小洋夷して邪教を傳ふ言と論はるる大意是る
 同く是は法法と傾覆せんといふし又洋夷を以て武と
 信ふはあつ然る者忘るる國家を欺んる相ちふ力を戦せ
 心とつりて洋夷を辨破し淫穢と打ち邪説と息め
 んといふは獲夷の獲謀詭術を悉く拒き即ち上云儀

謀と云ふのちれハ當今の急務といふ一邪説の害孟子
 乃時より唐宋ハ甚しく今ハ唐宋より幾子倍といふ
 ち一ちいひたまふて政刑の領とされしものハちと事
 邪説を拒くといふ處位は尚ほいふ事此得行ふ事而たれ
 ハ實行より空論といふはゆるふ事

孔子討陳恒

孔子の陳恒と討んと徒然の徒然に 討陳恒の義遂小畜人
 ハ與せしれハ魯の流とて言のゆゑハ人ハ未だ未だ
 るよとて討つるは之ハ魯と弱國と侮り居
 せハ其不きハ必勝の機ありと論辨し信ひ小哀と用

ふてあるはさしりるは傳小詳かなる然る後後儒於て
 されハ孔子の意ハ家とてせしめて力説するもあつと
 云孔子の陳恒と討んと徒然の徒然に 討陳恒の義遂小畜人
 子あると言す一知る下徒小畜と論し其の
 徒つるを得りてハ賊と討つる論なり 故に之徳利あ
 ばるをも哀らふ言て勅爲し終つて乃信む而ハ言戦
 疾より無謀の戦を以て民を済済と殺すは不仁
 なるハ一給て以て故に無席憑河して死志と悔るは
 ものよらむとせしめしるは法を怪し謀を好む事
 んものよらむとせしめしるは法を怪し謀を好む事

をわたり終るやふる見つる一後儒の家とて一と
 とめて甘んじつる況も一理あるかふに開ゆれども空論
 小なる實事小害ありはし悔懼の風とて一幽家乃
 禍とて存する中其の論を詳おとて又とれは爰
 了暑い方志の士に空論閑議を好む一と書に云る萬
 くに後儒の如

周易象義不可執一論

世儒周易を説くもの多くに易れ書と清虚よりて象論か
 りと貴い盈満と戒め謙下して身を保つことと多しと思
 つるは幾し易れ一端を知つる令分是らとしかし易は時

を知るは大方なりは清虚象論を不可執一論
 活動するときはあつて二十四卦なるは二十四爻一爻も象
 義を異し一動靜語黙皆一時の中をまるとは然るは
 清虚象論のと貴しといふは王弼の清虚象の是れ出たる
 況あり盈満と戒め謙下して身を保つことと多しと
 謙卦の意より一は時とて二十四卦を通観する時毎卦
 其義同か否乾卦は天の象剛健よりて萬物を始め二
 五と一卦の文と次九二は見龍田小を九五は飛龍天小を皆
 象と施しの象あり坤卦は地の象柔順よりて天と象を
 承て萬物をまひ乾小は及中より是より明ひて卦文の六二は

王の系 ヒツキ 日嗣の久し開闢の系皇統連綿し今も思治の
 一よりて四海系の國は比類なく其の天位かれは臣民
 たるもの歎ひするはきんハ勿論かれも是れはよき系と云
 へて其の本と論でこれハ論して耳官の陋を免せし
 今其實事論せんは身施行ゆる和の事蹟一掃お
 らしよ古より法神 天朝と云ふは 中世より名譽
 物にて忠誠を盡やする事蹟おたしはくは始く撰く論
 せし 東照宮政教を四海に施し給ひしして下乃
 法侯と仰て京師に於て 天臣の系をゆく 給ひ我國
 の餘り 皇室の遺乏たるはし 禁垣と増廣治理に依

此の田と塙 秘籍寶笈の散失せし 還納の俗友乃
 舊職と復し給ひ其他其蹟多きもの 隨て知るべし
 威公の神道と崇教と給ひ 系公神儒を尊ひ給ひえ
 且よ京師と遠採あり親王の御もるまて礼と事し
 名相ち社より里考の叢祠を成し治政を成し或は兼中
 一書く此れを以てしめ深初と致らんを云ふべし
 遠くより國史と修してハ 皇統を正同し善事由か
 の名分と嚴し 禮儀と編纂して 正統を叙し給ひ
 一類い何れなる 王の系よありては 景心
 公西山の著述と述するは其の遺失なり 忠誠と事し給ひ

一 終に和議を拒く事決講究一 破邦系の書と刊行
 せしめし方今蠻夷来逼日甚一日外奮武衛
 内息邪説是吾急務云々海内争講解行之書安知異
 日不為邪説之媒親書一終に又文臣小命を息拒
 編と蒙修せしめ和議を拒く料か一終に和議を以
 了法國を併吞しるに懸慮の本謀を以て是を拒くは法
 よと云伐謀しつるは其の謀を以て是を拒くは法
 やく焉 又も攘夷の事業は其の道徳を
 況して膠柱の論を以て自ら是とせしむるは
 同日の論ありしやうたう攘夷の志あるものら面し乃

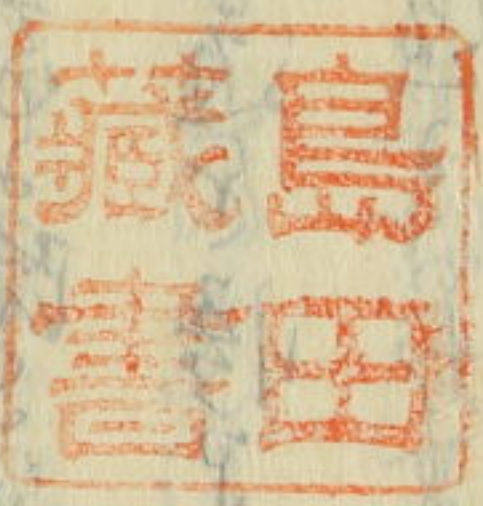
時處位を審思熟慮して身之私を省き其力の成り得る
 事とて交るふ行ひ舞率ふして後害を絶つるべし
 神聖同佛

神聖の道之倫を明ししるよまてて然の大道を以て神聖
 とせしむるは神聖と合せたるや一 大なる人倫の明る
 こと八曾て余の持論はよく天臣の事父子乃親之地の初
 二 天神の詔勅ありて倫既し明かり夫婦のあり 伊其諾
 言 伊其冊言の語は甚と去切のなるは 之貴なるは何なるは
 勿友の信は天神の協恭和衷なりて同じ 天神之事へま
 一 小く見つる されば是れ倫の倫の事と信合せて弘道破

神聖なる合一の法を成すは又空なるは也然るは
 近世皇國學の稱するもの皇統印の志を皇國の條
 中しくそのことを論せしむる皇見たり人倫天徳の大
 道なりと云ふ天神の時より人倫をやく言はるるはと悟ら
 せりて神聖なる道相及せりて法て造言一務く
 聖人と詭譎して自己の妄説を法に神聖の同
 歸たる天地の自然なる東西彼岸の隔たりを
 の朝に聖人乃書と得るは歴然なる法に考証
 天智の時漢唐の制と料酌して禮制を立給ひて
 とりふるは皇國學の行なりて違背し給ふは然る

皇と稱して聖人を思ふ思はるは歴然の聖人を詩記
 なるより人倫を茂め給ふは上古の神を茂めしを
 するは皇國學の統も國統を論して皇見しありと云
 ら思ふは皇國學の統も國統を論して皇見しありと云
 思ふは皇國學の統も國統を論して皇見しありと云
 思ふは皇國學の統も國統を論して皇見しありと云
 思ふは皇國學の統も國統を論して皇見しありと云

閑聖漫錄終



書閑聖漫錄後

我會澤先生著書殆充棟而其
既上梓行於世者亦不下數種晚
有閑聖漫錄之述一日先生出亦
曰此為晚諭世俗而作者亦有可
取乎既而書賈北澤生欲得先生

之著書刻之未謀於名曰善
哉乃請先生之年老且疾猶飛
勉授讐訛成而授之實其沒
前月六日也居數月生又來請曰
先生著書醒夥矣此編在之死
不廢剞劂者而某親得之於先生

可謂幸甚今剞劂將竟切而先生
不可見也君蓋志在存未余謂先
生之著書既行於天下古事傳誦
則新書之行亦固不待多之收也
抑先生夙抱有為之志學問正大刻
苦絕人其平生雖述道困厄之際而

志益銳著心益勤善八十且得
年猶一日也所述大率明大道而
塞邪一經原倫理而正人心至言
博莫非為天下國家者如新
畫六其一端如讀者不以其語言
平易必能察其用意所在觸類長

之則不唯學者可以為勸懲祛疑而
當路任政者亦將有所取益於此
吾乃不辭以固陋遂次弟其言以
與之俾附于卷尾焉

文久三年夏冬日

門人石河幹晴拜識

京都寺町通松原下ル
勝村治右衛門
大坂心齋橋安堂寺町
秋田屋太右衛門
江戸日本橋通二丁目
山城屋佐兵衛
江戸日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛
江戸淺草茅町二丁目
須原屋伊八
水戸下町本三丁目
須原屋安治郎

國本心藏

會澤恒蔵著

文久三癸亥年仲冬

京都寺町通松原下ル
勝村治右衛門
大坂心齋橋安堂寺町
秋田屋太右衛門
江戸日本橋通二丁目
山城屋佐兵衛
江戸日本橋通壹丁目
須原屋茂兵衛
江戸淺草茅町二丁目
須原屋伊八
水戸下町本三丁目
須原屋安治郎

